

術後痛の治療

松永万鶴子¹⁾ 四維 浩恵²⁾ 仁田原慶一²⁾
比嘉 和夫²⁾

¹⁾福岡大学病院手術部

²⁾福岡大学医学部麻酔科学

要旨：手術後の疼痛は術後合併症発生の要因の1つである。患者の希望時に鎮痛薬を筋肉内に投与する従来の術後鎮痛法では、主に鎮痛薬の投与間隔が長すぎるために鎮痛は不十分であり、60%～80%の症例は無意味な痛みを苛まれている。十分な鎮痛を得るための鎮痛薬の必要量は5倍～10倍の個人差があり、個々の症例の鎮痛薬の必要量を予測することは困難である。患者が主体となり鎮痛薬の必要性を感じたときに自分で鎮痛薬を使用して痛みのコントロールを行う自己疼痛管理法により効果的な術後鎮痛が得られるようになっている。安全で、より良い疼痛管理を行うには鎮痛薬の適切な使用と、副作用の予防と早期発見を行うことが重要である。そのためには呼吸数、脈拍、血圧、体温と同時に意識レベル、疼痛の程度の定期的な観察が必要である。術後痛を積極的に治療することで、激しい疼痛を感じる患者は10%に減少し、肺・心血管系合併症が減少し、入院期間は短縮する。

索引用語：術後痛、硬膜外鎮痛、自己疼痛管理法、オピオイド